

35周年特別企画 会員寄稿エッセー 「熊本野生生物研究会と私」

会誌編集委員長 坂田 拓司

2020年は熊本野生生物研究会設立35周年です。この間、会員の皆様の相互努力や意見交換によって本会の活動が進められてきました。しかし、会員の増加や高齢化、多忙化等によりお互いのコミュニケーションが十分に図られていない状況もあります。そこで、会員の皆様にエッセーの寄稿をお願いしました。テーマは「熊本野生生物研究会と私」としましたが、特に制限はかけませんでした。

結果的に19名の会員から寄稿頂きました。大変ありがとうございます。800字という字数制限によって、思いを十分に伝えることができなかつた方も多かつたことと思います。この点についてはお詫び申し上げます。

懐かしいできごとやクスッと笑うエピソードもあります。また、本会の原点や課題、今後の方向性を示す内容も多く含まれています。この企画が本会の発展につながることを期待します。なお、掲載はお名前の abc 順としています。

旅の仲間

天野 守哉

大学卒業後、北九州市の高校で臨時採用の教師として働き、教師になろうと熊本県を受験しました。合格して水俣高校に赴任しましたが、そこで出会ったのが現副会長の長尾圭祐さんでした。誘われるまま本会に入会し、以来、カモシカ、ニホンジカ、コウモリそして樹上性哺乳類などのいろいろな調査に参加してきました。

山に入ると何かしらの発見があります。その都度わくわくしたものです。中でも初めて参加したカモシカウォッチングでカモシカを発見したことや、巣箱調査でモモンガを確認したときの感激は言葉では言い表せないものがあります。「私が知らなかっただけで、山には確かに生き物がいて命を繋いでいる。」こうした経験は生物教師としての私の心に確実に入り込み、育ててくれたと思っています。関わった会のメンバーに感謝しています。

中でも私の人生を大きく変えたのが、タイワンリスです。熊本西高校に勤務していた時に、リスを見たという同僚の情報をもとに生物部員と調査を開始しました。タイワンリスと確認したのは2008年のことでした。リス情報に素早く対応できたのは本会で様々な調査にかかわってきたからだと思います。

以来12年間、タイワンリス防除等連絡協議会のメンバーとして、会員の安田雅俊さんと共にかかわり続けています。職場も高校から博物館ネットワークセンターを経てまた現場に戻ったわけですが、この間に動植物について一から勉強し直し、いくつかの種については論文等にま

とめることもできました。本県の動植物の生息状況を明らかにすることに少しは貢献できたのではないかとと思っています。

また「くまもとの哺乳類」の執筆に参加できたのも大きな経験となりました。

途中、仕事が忙しくて退会を考えたこともありましたが、今は本会を続けていて本当に良かったと思っています。これからも生き物たちを追いかける私の歩みは続きます。どんな仲間とどんな旅ができるのか、楽しみにしています。

* * *

熊本野生生物研究会35周年記念に 寄せて

藤吉 勇治

35年前の発足当時のことを懐かしく思い出しております。熊本野生生物研究会発足前に中園敏之先生から会設立の構想をお聞きしました。その熱い思いに感銘し、私もその一員に加えてほしいとお願いし、同時に私自身も地元で子ども達の環境教育を目的に「矢部郷自然観察会」を立ち上げました。熊野研と共に35年の歴史を重ねてきました。

矢部郷自然観察会を1985年に発足させ、会報の創刊号の準備を進める際に中園先生から紹介頂いた本がありました。それはピアンキ著の「森の新聞」でした。森の新聞の記者は子ども達です。矢部郷自然観察会が目的とする子ども達の育成と重なります。そこで会報の名称を

「森のたより」としました。

翌年の1986年に創刊号を発行し、その冒頭で「野外へ出て自然をじっくり見つけ、自然の音に耳を傾け、体全体で自然を感じていると、感動があり、喜びがあり、驚きがあります。これが自然観察の楽しさではないでしょうか。ところで、最近自然破壊のニュースをよく耳にしますが、そのとき思うのは、『自然のしくみをよく知らないのではないだろうか。』『自然に無関心なために見過ごしてしまっているのではないだろうか。』ということです。私たち人間も生き物である以上、他の生き物たちとのかかわりなしでは生きられません…(略)幸いこの矢部郷はまだまだ豊かな自然が残されています。この豊かな自然を子孫に伝えていくことは、今生きている私たちの大切な使命ではないでしょうか。…(略)自然に対する認識を深め、それと共に次の時代を担う子どもたちをたくましく育てていきたいと思えます。」と記しています。

熊野研のメンバーに加わり、野生生物の観察や調査方法などを学び、カモシカ調査にも参加しました。県内の自然や環境の現状を知り、多くの方々との出会いがあり、その繋がりが今も続いていることをありがたく思っています。

本年度、私は熊本県自然保護関係団体協議会の会長という立場になりました。この協議会には熊野研や矢部郷自然観察会など12団体が加盟しています。熊野研の目的にもあるように環境教育や生物多様性の保全に寄与することができればと思います。35周年記念おめでとうございます。

* * *

会員であると同時に取材対象という関係

久間 孝志

大学で生物学を学んだが、何の因果か新聞記者になった。就職が決まった時に思い描いた夢は、「新種発見をスクープすること」だった。記者の仕事がどういふものかも知らないまま、「誰も見たことがない生き物の発見をスクープできたらカッコイイだろうな」と漠然と考えていた。

その機会は、記者になって四半世紀近くたってから訪れた。「天草でサンショウウオの新種発見」。記事は、朝刊の1面を飾った。「それまでは別のサンショウウオだと思われていたものが、詳しい分析の結果、別種だと分かった」という内容で、若い頃に夢見たような劇的展開ではなかったが、それでもうれしかった。研究者の地道

な努力を大きく報じることができたことを誇りに思った。

熊本野生生物研究会は、会員であると同時に取材対象でもあり、これまでに何度も記事を書かせていただいた。サンショウウオの件も含め、個別にお世話になった会員の方も多く、私の記者としての大切な部分を培ってもらった。

近年、メディアでは自然科学系のニュースの重要度が増し、「生態系の保護」や「生物多様性の保全」などのワードも注釈なしで当たり前のように使われるようになった。社会的関心が高まる中で、地道なフィールドワークを続ける熊本野生生物研究会の役割は一層増している。

(熊本日日新聞記者)

* * *

九州のカワネズミ

一柳 英隆

ぼくが、それまで住んでいた山梨から九州の球磨川流域に引っ越してきたのは、2009年である。九州のカワネズミは、環境省のレッドリストで絶滅のおそれのある地域個体群となっていることもあり、山梨でカワネズミを中心に河川生物を見ていた身としては、その生息状況は気になるころだった。

九州の溪流を歩くと、意外にも多くの溪流でカワネズミが確認できた。カワネズミは岸をコンクリートで固められると生息できなくなることが多いのだから、これくらい溪流がコンクリート護岸化されれば本州ではカワネズミは見つからないだろうと思われる溪流でも、九州のカワネズミは生きていた。それを踏まえて熊野研の人たちと一緒にカワネズミの情報交換会や観察会をやったのは、2010年の夏のことだ(それが、ぼくが熊野研と関連した最初のときだ)。九州のカワネズミは、糞内容物から見る限り、かなりサワガニに依存した食生活を送っている。全国的にみると、九州のサワガニ密度はかなり高いし、底生動物の現存量も大きい。温度が高いので、河川の生産性が大きいのかもしれない。

ところで、球磨川では2020年7月に豪雨がいった。流域全体で激しく雨が降り、球磨盆地下部からその下流の峡谷部での水害は甚大だった。溪流部でも、多くの溪流が大きな物理的攪乱を受けた。土石流が生じた場所も少なくない。カワネズミや生き物たちはどうなったであろうか。

気になって豪雨後の溪流を探索した。糞などのカワネズミの痕跡はあちこちでみつかった。本当にひどい土石流被害を受けた溪流以外では、カワネズミたちが局所的

に絶滅してしまったということはなかった。少しだけ安心。周りにはいるので、見つからなくなった溪流にもカワネズミたちは戻ってきてくれそうである。ただし、災害復旧として川をコンクリートで固めてしまわない限り、である。しばらくモニタリングを続けたい。

* * *

出会いを振り返って

石橋 真奈

熊野研設立35周年おめでとうございます。ここ数年、活動に顔を出せずにいて、挨拶できていない方が沢山いらっしゃいます。この場をお借りして、熊野研との出会いや自身の近況についてお話させてください。

熊野研に入ろうと思ったのは、何よりも野生生物が好きだから。ですが、もともとは動物園に行って動物を見たり、ペットのお世話をしたりすることが好きだけで、野生生物には興味を持っていませんでした。それが、高校生の頃、生物教室の棚に飾ってあったカモノハシの剥製に興味を持ち、生態を調べるようになったことがきっかけで野生生物を好きになりました。カモノハシが想像していたよりも小さかったことや、オーストラリアにしか生息していないこと、単孔類といった変わった種類であること、クチバシがあること、卵生だけど乳腺があること、蹴爪に毒を持っていること等々、生態や形態に面白さを抱き、もっと沢山の生き物について知りたいと思うようになりました。そして、野生生物が好きな気持ちと興味関心から、東海大学農学部に進学した後、熊野研に入ることを決めました。

熊野研での活動の全てが私にとって初めての経験で、野生生物の調査方法や生態についてたくさん学ばせて頂きました。その甲斐もあって、大学卒業後は環境コンサルタントの会社に就き、哺乳類や鳥類の調査を中部、近畿、中国地方を中心に行ったり、環境教育の取り組みのお手伝いをしたりと日々生き物に関わっていました。

現在は、環境コンサルタントの会社を辞め、福岡県でシステム開発の仕事に就いています。仕事で生き物と関わることは無くなりましたが、相変わらず生き物のことが大好きです。ただ、外出する機会も減り野生生物に触れることができません。生活も仕事も落ち着いてきましたので、これからはフィールドに出て野生生物に触れる機会を増やしていきたいです。

* * *

熊野研と私

櫻村 敦

私は2014年に東海大学農学部に着任し、その年に熊本野生生物研究会にも入会し、「くまもとの哺乳類」も一部だけ執筆させていただきました。そして熊本地震以降、本学農学部は南阿蘇村から熊本市内の熊本キャンパスに移転することとなりました。当時は、どうしても授業再開に時間がかかり学生の卒業研究もままならぬ中、八代市内の実家周辺の新幹線高架下でオヒキコウモリを観察していた学生がいました。丁度そのときに、鹿児島国際大学の船越公威先生の来熊にあわせた新幹線高架下でのオヒキコウモリの調査に同行させていただく機会を設けていただきました。学生も同行しての調査では本人とともに大変勉強になり、今でも有り難く感じています。

その後、阿蘇実習フィールドとして阿蘇の実習施設が利用できるようになり、本格的な調査も再開しつつあるなか、昨今のコロナ禍となってしまいました。遠隔授業など大学での教育のやり方は大きく変わってきましたが、熊本地震の経験から今最大限にできること、後悔のない教育活動ができるように邁進しています。2023年4月には新たな臨空校舎が完成予定で、そこでは実習施設と講義棟や研究棟が敷地内に併設された環境になり、阿蘇実習フィールドも活用できるようになります。これからどのような世の中になっていくか予測ができない状況ではありますが、都市部、農業生産地帯そして中山間地域の3つの多様なフィールドで、私だけでなく未来を担う学生が熊本の地で自然を感じ、楽しみながら学んでいけるような環境を築き、熊本野生生物研究会の活動にも微力ながら貢献できればと思います。

(東海大学農学部応用動物科学科)

* * *

熊野研に入会しての財産

松井 英司

熊本野生生物研究会と改称する前の熊本野生動物研究会との出会いを思い起こそうとしたが、何しろ30年程も前のことなので、どうにも思い出せない…。

1993年に行われた龍門ダムが出来る前のダム湖に沈む集落跡や大分県中津江村栃野での生物調査を行った記憶は呼び起こされた。1993年以前のことは「??…」である。それ以降は、カモシカ調査には3回?!参加したと思う。1回目?!のときに配給(この配給には「これをあげるから次回の調査の時もこれを持参し必ず参加しなさい。」

という意味があった!?) された深緑色のゴアテックスのレインウェアは、だいぶ撥水力が劣化してきたが今も使っている。

熊野研の生物調査といえば、野営して夜を過ごすわけだが、印象に残っていることがいくつかある。その一つが、中園敏之氏の興味深い話をたくさん聞いたことである。中でも印象深い逸話がある。それは、中園氏が会員と共にキツネに発信機を付けて山奥まで車で追跡していた時のことである。もう少しで山道も行き止まりのところまで来たときに、受信機の針の振れがだんだん強くなってきた。それは、追跡中のキツネが山道の奥からだんだん近づいてきていることを知らせていた。しかし、そこに現れたのは、傘を差して顔を隠した黒ずくめのヒトの姿であった。そのヒトが車の真横に来たときに受信機の針が「ピー!!」と振り切れた。車の真横で一旦立ち止まり、傘で顔は見えないが身体の動きから運転席の方を徐々に振り向いたのが分かった。そして、そのヒトが車を通過して行くにつれて、受信機の針の振れがだんだん弱まっていった。あまりの怖さに、助手席の人と「わあ~!!」と抱き合って震えたという話だった。実に興味深い話だった。

* * *

熊野研での五十歳からの出会い

長峰 智

熊野研に入会して50歳を過ぎた頃、2002年のカモシカ特別調査に参加した。私にとって初の本格的生物調査である。この時は、多良木町槻木で遠くからではあったが、初めてカモシカを観察したり、市房山で寒さに震えながら枯れ葉と雪に覆われた林床にあるだろうカモシカの糞を探したりして、大変印象に残る調査であった。

私の中でのカモシカ調査が一段落した頃、坂田拓司さんから誘われて水俣市大川国有林での樹上性哺乳類の調査に初めて参加した。2009年6月に巣箱を、さらに9月にカメラを設置した。この調査ではヤマネ、モモンガ、それにムササビの樹上性哺乳類のスター達を確認できた。特に9月の巣箱見回りで、子育て中のヤマネを初めて確認したことは忘れられない。梯子に登って巣箱を開けた長尾圭祐さんが、下で待機している我々に向かって興奮気味に報告してくれたことを今でも覚えている。この時のヤマネの確認は水俣では江戸時代の「毛介綺煥^{もうかいきかん}」以来の公式確認だったと書いておこう。その後、樹上性哺乳類の調査には五木村や八代市などにも同行し、数カ所でヤマネを確認した。

そんな折、真冬の五木村調査のついでに、吐合洞に寄ってコウモリ調査もおこなった。それが発端となってコウモリ調査にも同行するようになった。主に内大臣の隧道や八代平野の新幹線高架と錦町の旧海軍跡の兵舎壕などでの調査だ。そもそも私はコウモリについても全く無知で、調べてみると日本ではコウモリは絶滅種を含めて37種も確認されているとのこと。現地で坂本真理子さん等にコウモリの特徴を何度聞いても覚えられない。それでも、種名は頭に浮かぶようになった。

上記の動物達とは50歳を過ぎての初の出会いであったが、コウモリが羽ばたき、ムササビやモモンガが滑空し、ヤマネが素早く樹上を走り回り、そしてカモシカが地上をノソリと歩いている夜の森を想像すると、ワクワクしてくる。

* * *

本会と生物と環境 –これからの期待–

長尾 圭祐

本会は、発足当初から生物研究・環境教育・親睦を motto に35年間歩んできました。それらの重要性を今、改めて認識させられます。会発足から35年の間に、地球規模では、アマゾンの森林が乱開発とアグリビジネスによって、日本の国土面積の1.2倍が消失しました。また、九州からイヌワシがいなくなり、九州ツキノワグマ個体群が絶滅し、九州のカモシカはその9割が姿を消しました。この他にも、ニホンザルやシカによる食害や外来種問題もあります。近頃では、ダムによる治水は行わない社会に変革を遂げたと思っ矢先、熊本県は再びダム建設に舵を切りました。日米問題としても、沖縄の辺野古のサンゴ礁で、262種の絶滅危惧種といくつかの新種が今まさにコンクリートと土砂の下敷きになりつつあります。

一方、高校生物の教科書では、「絶滅の渦」「生物多様性」など、生態系の記述は充実してきました。入試を例にとっても、「森林に道路を通すと森林に生息する生物は何種類になるか」といった問題も見受けられます。解答の過程で、生物種は環境変化と森林の分断により失われた面積に対して指数関数的に減衰する、といったことを学んでいきます。しかし、社会に巣立てば、「環境のことをあまり言うな。社会経済が停滞する。」という言葉が襲い掛かり、環境についての話題は避け始める現状に心が痛みます。未来を担う世代には、経済とは、独占資本体や政治権力・行政権力のもとに収まる金の流れのことだとあきらめるのではなく、環境をよくする発想での経済構造の創造を発想してほしいと思います。この実現

は社会構造的な問題なので簡単ではありませんが、若者はからくりが解けると元気づけられるものです。

本会でジュニアの養成、親睦的な自然観察会の充実、自然保護団体等協議会加盟他団体とのコラボレーション、生徒・学生公募の会員研究発表会などを企画してはどうでしょうか。

* * *

中園敏之と私とカモシカ

中園 朝子

内大臣にカモシカの直接観察を行ったのが、かれこれ30年くらい前になるだろうか。教員になって3年目、ケニア旅行に参加したことが熊野研と関わるスタートだった。その旅行は平成3年の夏であり、その年の秋に直接観察に行ったことを覚えている。

ケニア旅行の際、本会がカモシカ調査をきっかけに設立されたことを知り、カモシカに興味をもった。中園敏之の誘いで参加し、双眼鏡越しにその姿を見た時の感動は忘れることが出来ない。その後、平成6年4月に教職を辞し、中園敏之と共に九州自然環境研究所を設立した。以来27年間、環境調査業務と野生動物保護管理業務に取り組んできた。

カモシカを初めて目撃した時、内大臣は照葉樹林からなる保護林を含む豊かな森であった。しかし、現在、そのカモシカ発見時の面影はほとんど無い。下層植生はシカの忌避植物以外まったくなく、ディアラインがはっきり形成されている。私たち哺乳類関係の人間がしっかり提案をすることが出来ず、シカが増え続け、森林を崩壊させるところまで来てしまっていると言わざるを得ない。

平成30年・令和元年のカモシカ特別調査で、内大臣においてカモシカの糞が発見されたのは小松神社周辺のみであった。明らかに内大臣のカモシカは減少している。

カモシカの推定頭数は熊本県では42頭である。カモシカが生き続けられるように、また、これ以上減らないように最大限の努力をしていくことが、私が中園敏之と共に歩いてきたことに対する人生の最大の使命であると考えている。熊野研があったからこそ中園敏之と知り合い、生物に係る仕事をさせていただくことが出来ている。カモシカが生息している熊本であり続けるために、最大限の保護に向けて努力をし続けていこうと決意している。熊野研の35周年にあたり、みなさんとの出会いと繋がりに心から感謝し、今後のカモシカ保護のご協力をお願いしたい。

最後に、中園敏之が大病にも係らず、私をサポートす

るためにまだまだ元気であることを付け加えたい。

* * *

エピソードは増え続ける

坂本真理子

誰かが言っていた『「稼ぎ」と「仕事」は違う、いい「仕事」を得られたら人生は幸せだ』と。この場合の「仕事」とは収入の有無にかかわらず自分で取り組んでいることを指すらしい。これまでに職業を2回替わった。いずれも20年弱ずつ働いたが、「仕事」のはずが「稼ぎ」に変わりつつあると思ったときに続けられなくなった。しかし、熊本野生生物研究会での「仕事」は人生に大きな喜びを与えて続けてくれている。入会したのは発足半年後なので、もう34年以上前のことである。

研究の面白さを教えていただいたのは最初の事務局担当の中園敏之氏である。研究対象を両生類に決めた大きなきっかけをくださったのは初代顧問の吉倉 眞先生。そして、コウモリ類の面白さを教えてくださったのは初代会長の入江照雄先生であった。そして、何よりも大きな影響を受けたのはこれまで一緒に調査に出かけてきた熊野研の仲間たちである。利害関係のない存在であり、自由に意見を言い合い、ときには反発・議論し、ときには「そうだ、そうだ！」と同感し、そしてつらいときは静かに支えてもらった。かけがえのない大切な仲間である。

たくさんの思い出がある。海岸の作業小屋に泊まり、海水で食器を洗った「無人島大島のカイウサギ調査」、床がところどころ抜けていた林道わきの倒れそうな小屋に皆で宿泊し、そこで翌日のお弁当まで作った「カモシカ調査」・清水寺のお堂に泊まり、雪がちらつく境内で朝食を作った「久木野のニホンザル調査」・ライオンの鳴き声を聞きながらテントで眠った「ケニアへの旅」・眼下に白川を望みながら陸橋線路を渡った「北向山の樹上性哺乳類調査」・東屋のスズメバチの巣に気づかず真下でお弁当を広げ、中身もお弁当箱も残して逃げた「大滝の樹上性哺乳類調査」など数えきれない。これからも面白いエピソードはきっと増え続けられると思われる。

* * *

カモシカ調査の思い出

高野 茂樹

熊本野生生物研究会の創立35周年では、大変おめでとうございます。また、その間の功績が認められ、「くまも

と環境賞」の受賞でもおめでとうございます。

私は、1980年後半の頃から熊本県でのニホンカモシカ生息調査に参加させていただきました。当時、調査員はみんな若くてバリバリの体力を發揮し、急斜面を等高線沿いに歩いて、カモシカの糞を確認するという大変な調査でした。私は糞塊調査域の植生概要を調査する担当でした。糞塊調査の皆さんとは少し離れて、高木層、亜高木層、低木層、草本層の植物を確認して、植生調査表に記入し、さらには、食痕なども記録したことを記憶しています。何せ急なところで、しっかりした足場が少ない中での上を見ながらの作業、よくできたな、などと思いついて返しています。そのお陰で、様々なタイプの植生に出会うことができました。ヤブツバキクラス域では、ルリミノキーイチイガシ群集、ツクバネガシシラカシ群集などや少し標高の高い移行域のモミーシキミ群集、イロハモミジケヤキ群集など、そしてブナクラス域ではブナシラキ群集など35を超える群落のタイプと出会うことができました。よく茂った森を見ると植生調査をやりたくなくなるほどの気持ちを持っていましたので、大変貴重な経験をさせていただいたと感謝しています。

現在は体力が次第に衰え、不安定な場所で上を見ては記録用紙に記入する糞塊調査に追い付けなくなり、もう調査には参加していません。しかし、これまで会が主体となって続けられてきたカモシカ調査は、カモシカ生息保全への貢献度が大きく、今後も持続した調査が行われることを願っています。

* * *

多様化の波の中で未来を見据えて

高添 清

川辺川ダム・荒瀬ダム撤去・水俣の産業廃棄物問題・水俣病問題・ハンセン病・熊本地震・白川氾濫・阿蘇地域の水害・阿蘇の草原再生・有明海の再生・地球温暖化など、最近のわたしたちの周囲に起きたことはあまりにも多い。これら全て現代社会の課題である「人権・平和・共生・環境」の取り組みに包含される。

しかも今、コロナウイルスによる課題はあまりにも世界中に難題を課す。「二兎を追う者は一兎をも得ず」と言われながら「命か経済か」の問題に翻弄されている。

その渦中でも、野生研は会則の目的にある理念を掲げて活動し、森羅万象を対象に調査研究をしてきた。2020年には永年の活動実績が認められ、くまもと環境賞を再度受賞したことは喜ばしい。中園敏之さんと私が九州大学の小野勇一先生のご指導を受けながら野生研を創設し

た当時の記憶をはじめ、振り返ってみると「本当によくやってきた、ご苦労様でした」と会員の方々を始め、今日までの事務局の皆さんには心から感謝申し上げたいと思う。

創設時期のカモシカ調査時、夜のミーティングでのネタの尽きぬ会話に、本会のメンバーの「多様さ」と愉快さを感じ、この体力と知力がある限り本会の前途の明るさを感じた。

今後も、本会の重要な活動計画が予定されている、会員の方々もぜひいくつかの企画に参加され、共にいろいろな研修と、情報交換されることを願う。そのことが本会会員各自の力量を高め、ひいては事務局の方々のご苦勞に報いることと思う。

本会は、熊本県の各種の審議会や熊本県自然保護団体協議会（県内全域）、エコパートナーくまもと（熊本市）などに委員や、役員を出し、これからの「熊本の自然と人間の関係」を方向付ける鍵を握っている。県内の関連諸団体・機関との情報交換や協力をはじめとして、今後県内における本会の責任と役割の重さは益々増してくる。否応なしに本会はその役目を担うことになるかと予測している。

（熊本野生生物研究会顧問）

* * *

写真の整理で気づいた熊野研での活動履歴

田上 弘隆

最近では、写真の整理をパソコンで行うことは当たり前だろう。本会会員の中でも同様の方がたくさんいらっしゃるのではないかな。そしてさらにここ数年では、写真をインターネットの専用の保管場所（クラウド）に保存することが主流となっている。私も、「わさもん」の名折れとならないよう真っ先に飛びついた口である。撮影はしたがまったく整理のされてなかった写真を、とりあえずすべてクラウドに放り込んだ（というより、自動的に放り込まれた）。すると、なんということでしょう。すべて時系列で整理され、あまつさえ「被写体」や「撮影場所」、「人物」などで自動的に分類までされている。こりゃスゴい！ で、よく見ると、「キャンプ」や「動物」、「山都町」など、なじみのあるキーワードで自動分類された写真の多いこと多いこと。過去20年超の自分の行動履歴がAIで解析されてしまった。また、その写真の中に登場する自分と会員諸氏の懐かしいワンシーン。ああ、あの頃は、みんな若かったのね…。

ふと気がつけば本会に入会して20年が過ぎようとしている。事務局長を6年間つとめさせていただいた。現在は事務局でホームページの整備や各種帳簿などのデジタル化に取り組んでいる。今後は、コロナ禍によるワークスタイルの変容に本会事務局も対応していかなければならないだろう。本会の大切な「変わらないもの」を守りつつ、SDGs的な持続可能な会の運営の一助となるよう、運営委員のみなさんと一緒にがんばっていききたい。

* * *

本会の可能性と課題

～大局的に見た役割とそれに沿うには～

塚原 和之

哺乳類の研究者を中核として発足した本会だが、会員の専門分野の範囲は広い。また、活動的な博物館研究紀要などがないなかで、本会誌は一定の学術的な内容を伴うレポートの掲載誌として主要な地位を占めるといってよい。以下に、少し斜めから見た、幾分率直な本会に対する課題・要望を整理しておきたい。

熊野研との出会いは牛深大島のアナウサギの調査である。また、研究発表会に参加させていただいたが、これまで所属してきた会とは若干違うものを感じた。お互いを先生と呼び、新参者に一定の敷居を置いている集団に見えてしまった。しかし、県RDB検討委員会や県自然保護関係団体協議会にも参加させてもらったが、新参者の私が物事の運営にいたるまで疑義を唱える中で、熊野研選出の委員にはニュートラルに発言の本質を理解しようとされていた方もいた。

一方で、環境に対する責任や後継者の育成では注意しなければならない問題・課題もある。シカによる森林被害問題等、様々な分野においては、本会は県内で主要な役割を果たすことができる地位にある。しかし、調査研究の対象は哺乳類が多く、多様性を高めることを積極的に進めることも必要である。例えば、上益城地域の圃場整備での生態系への配慮要望の連名依頼の件では参加をいただけなかったのは残念であった。それに対し、宇土半島のクリハラリスの駆除に積極的に発言・活動されたことには矛盾を感じたものである。

惰性的な多様性縮小に、さらなる気象的な打撃が加えられる近年では、研究団体としても多様性と研究対象を守るため、必要なことを指摘し動くことは使命の一旦ともなっている。小さな声にも耳を傾け、必要性を適切に認知してほしい。加えて、いくら働きかけても改善されない要因は、行政の組織構造に起因する場合も多い。環

境・多様性を扱う重要な事業や計画の委員に客観的に選任された生物専門委員がいないなど、抜本的原因を改善する要望が必要である。

* * *

熊本の海産魚類相研究のこれまでとこれから

和田 英敏

熊本県は有明海・八代海（不知火海）の閉鎖性の高い2つの内海と東シナ海に面する天草灘の3海域に区分され、それぞれの海域は特色の異なった魚類相を有していることから、非常に高い多様性を有しています。熊本県近海の魚類相は1970年代までに九州大学をはじめとする研究チームによってまとめられました。しかし、それから半世紀が過ぎた現在、1970年代以降の熊本県の海産魚類相を再検討した研究はありません。私は熊本県の野生生物の多様性を正しく評価するためには、現在の分類学的知見に基づく本県近海の魚類相の再検討は急務であると考え、熊本県産魚類の研究に着手しました。その過程で、近年において新たに確認された熊本県産魚類には本来南日本太平洋沿岸や琉球列島以南を主な生息域とする南方系魚類が多く含まれることが明らかになりました。

宮崎大学と鹿児島大学は天草市近海を中心とした長期的な魚類相調査を行っており、2019年には熊本県初記録となる6種を本会会報において報告し、これらのうち5種が南方系魚類であることが明らかとなりました。これらは天草近海の魚類相を網羅的に調査し、601種を記録した1970年の菊池泰二博士の報告においても記録されておらず、ごく最近熊本近海に出現するようになったものと考えられます。このような事例は高知県や鹿児島県などの黒潮流域にあたる海域で多く確認されているものの、熊本県沿岸海においては類を見ないものでした。

我々を取り巻く自然環境は刻一刻と変わりつつけており、海洋においてもそれは例外ではありません。そのため本県の海産魚類相を正確にまとめるには、現在の分類体系に従って過去の文献の情報と報告に使用された標本を整理し、多くの魚種を標本に基づき記録し、知見を蓄積する必要があります。豊かな熊本県の海の魅力を再発見するためにも、今後も精力的に研究を続けていきたいと思います。

(鹿児島大学連合農学研究科農水圏資源環境科学専攻・

博士課程3年次)

* * *

モノ言う集団

矢加部和幸

よく散歩に行く本妙寺山の本妙寺公園（熊本市西区）にはおそらく6匹以上の野良猫がいる。数人の餌をやる人がいるからか、人馴れしていて誰にでも媚びるように寄ってくる。猫が決して嫌いというわけではないが、時に散歩が不愉快なものになる。

というも猫に餌をやっている人を見かけると注意するので、その場が気まずいものになる。さらに一緒に散歩している妻が「嫌われるようなことを言わなくてもいいのに」と不機嫌になり、言い争いになる。妻にいやな思いをさせてまで注意しなくてもよさそうなものだが、性分だから仕方がない。

これから冬本番になると公園にはシロハラがやってくる。跳ね歩きながら落ち葉下や土中の昆虫やミミズなどを採食するが、その様子が野良猫の狩猟本能をくすぐるらしい。飼い猫もスズメやネズミなどを捕らえて自慢気を持ってくるそうだが、この公園の野良猫は中国南部などから渡り鳥のシロハラを押さえる。また、公園のあずま屋を住みかとするヤモリもターゲットのようだ。

餌をやっている人に、野良猫のこんな側面を話すと分かってくれる人と、それでも野良猫が可愛いとか可哀そうとか反論してくる人がいる。しかし、野良猫が公園の生態系をかく乱していることは間違いない。野良猫の問題はともすると動物愛護の側面からだけでとらえられがちだが、生態学的な側面からのアプローチも重要である。

熊野研は科学の目で自然を見る面白さを知っている人の集まり。任意団体ではあるが、人間に都合よく動植物を見がちな風潮に、“科学の目”で見た自然を情報発信する任もあるはずだ。野良猫はもちろん、今や害獣駆除という視点だけのイノシシやシカの問題もしかり。科学的なデータに基づく「モノ言う集団」として、もっとかかわりを持ってほしいと思う。

* * *

思い出とともに感謝する

山下 桂造

熊本野生生物研究会が発足するきっかけとなったのが、中園敏之氏と高添清氏が中心となって実施されたカモシカ調査であると、私は認識している。昭和59年の夏、カモシカ調査に今はなき今江正知先生のお口添えで、はじめて参加させてもらった。そのとき、なんとということであろうか、私はカモシカ調査の日程を忘れてしまってい

た。参加する日の夜に思いだして、すぐに現場の五家荘の樅木にむかっただけであった。なんとはずかしいことか。当時のカモシカ調査は2週間あり、私は後半に参加した。最初の2日間は要領を得ず、消極的だったので高添清氏にしっかりと指導していただいた。そうして、やっと調査員の一人になれたのだった。

36年前のブナ林などカモシカがいたところはスズタケが密生しており、その中でカモシカの糞塊を探しながら移動するのは、非常に体力を使うものだった。

昔、市房の8合目にはスズタケが密生していたのだが、10年ほど前登ったときにはスズタケは消え、ブナの大木も消えていた。信じられなかった。当時と比べてみると、今の森は嘘みたいに変化している。このことを自分自身で確認することができた。

高校の教師として働きながら、カモシカ調査に参加させてもらったことが、授業をするにあたって大きく役立っている。自然を知ることが生物学の目的であるが、今の大学は遺伝子の研究が多いようである。生物の教師として一番の基本は自然のありのままを知ることであると思っている。それを知る機会をわたしはこの研究会で引き続き学習している。ありがたいことである。

* * *

熊本県における外来リス対策

安田 雅俊

私は本会の他の会員とともに熊本県における外来リスの調査や防除にかかわってきたので、それについて記したい。

2008年末、熊本県宇土半島における特定外来生物クハリリス（別名タイワンリス）の定着が天野守哉さんらによって確認された。宇城市三角町ではこの外来リスによる農作物や森林への被害が大きな問題となり始めていた。2009年度には罠をもちいた捕獲が開始されたが、初年度の捕獲数は141頭と少なく、個体群増加が抑制できるほどではなかった。天野さんらの調査で明らかになった生息域から推定生息数は5000頭レベルと見積もられた。2010年1月、日本哺乳類学会から県知事および環境大臣、農林水産大臣に早期根絶対策の要望書が提出され、同年5月、宇城地域振興局が中心となり「宇土半島におけるタイワンリス防除等連絡協議会」が組織された（学会からの要望書は2013、2016、2019年にも提出）。これにより宇城市と宇土市において本格的な防除活動が開始され、猟友会会員や生産者の努力により2010年度の捕獲数は3112頭を記録した。

捕獲個体は本会会員らによって解剖され、得られた妊娠率や産子数の値から個体群の年増加率は約1.4と推定された（本誌6号、7号に論文掲載）。これはリスの数が2年で約2倍に増加することを意味する。2011～2019年度の捕獲数は1527, 751, 258, 72, 65, 32, 51, 50, 38頭と推移した（総捕獲数6097頭）。この間に捕獲体制は捕獲報奨金制から専従捕獲従事者制（バスターズ）に移行した。2018年度以降はバイト法で残存個体を発見して捕獲することを続けており、地域個体群の根絶達成が現実のものとなりつつある。

このように熊本県における外来リス対策は捕獲従事者の日々の努力とともに、本会会員の力に支えられてきたと言える。もし何も対策がとられなければ、発見から数年後には生息数が1万頭を超え、リスが爆発的に増加して手のつけられない状況に陥っていたらろう。

（森林総合研究所九州支所）